

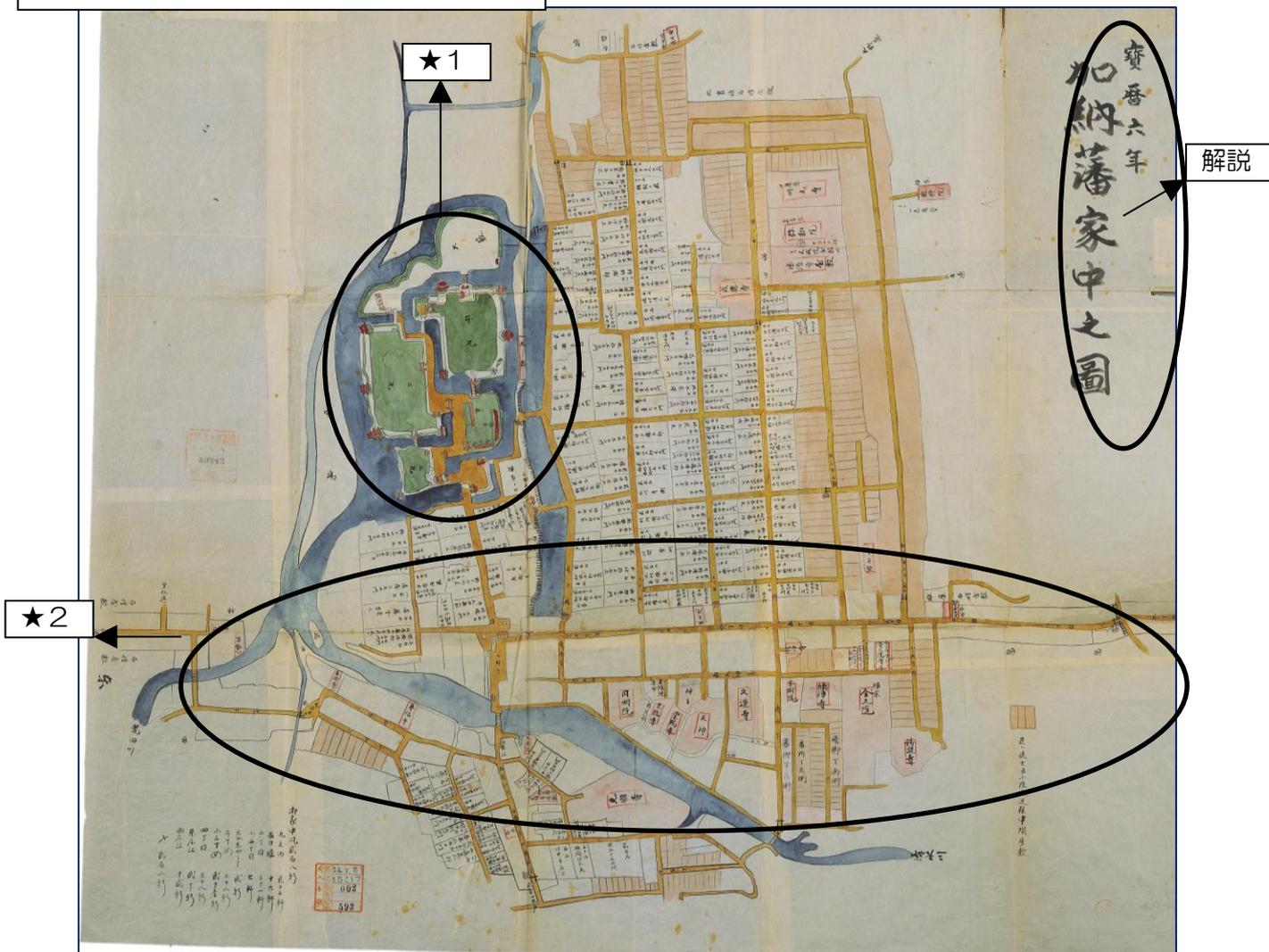
授業で使える当館所蔵地図

No. 38 『加納藩家中之図』

発行年：1756（宝暦6）年

サイズ：77×90cm

作者：不明



【解説】加納藩家中之図にはなにが記載されているのか

1756（宝暦6）年につくられた、加納藩に仕える藩士の家の所在を示した地図。150年ほど前につくられた城下町絵図（岐阜市歴史博物館所蔵）と比較しても大きな変化はないため、加納城下町、中山道加納宿の完成された姿として捉えることができると考えられる。現在も残る地名や地形から、加納城下町の町割りの特徴を捉えたり、その町割りの特徴から徳川家康自ら見分して築城した加納城が、当時一体どんな役割を果たしたのか考察したりすることができる。

★1 加納城（だれが、いつ、何のためにつくったのか）

天下分け目の関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が、大坂城の豊臣氏に対するために、合戦直後の1601（慶長6）年に加納に城をつくることを命じ、1605（慶長10）年に完成した。初代城主は、家康の長女亀姫の婿である奥平信昌であった。信昌は家康の親族であり、長篠の合戦でわずか500人で長篠城を守り抜いた信頼できる武将であったことから、家康がこの加納城をいかに重要視していたかがうかがえる。

★2 中山道の宿場町としてさかえた加納

関ヶ原の戦いの後の岐阜町は政治の中心ではなくなったが、織田信長に集められた商工業者はそのままとどまり、岐阜町は経済の中核都市として発展を続けた。加納は、その岐阜町と尾張名古屋を結ぶ街道と、5街道の一つである中山道の交わる場所にある。家康により、加納城築城と同時に中山道の整備が始まった。この地図が作成された4年後の1760（宝暦10）年には、総町の人口3123人、旅籠屋と旅人宿が各30軒あった。

【活用の例】小学校6年生「江戸幕府と政治の安定」

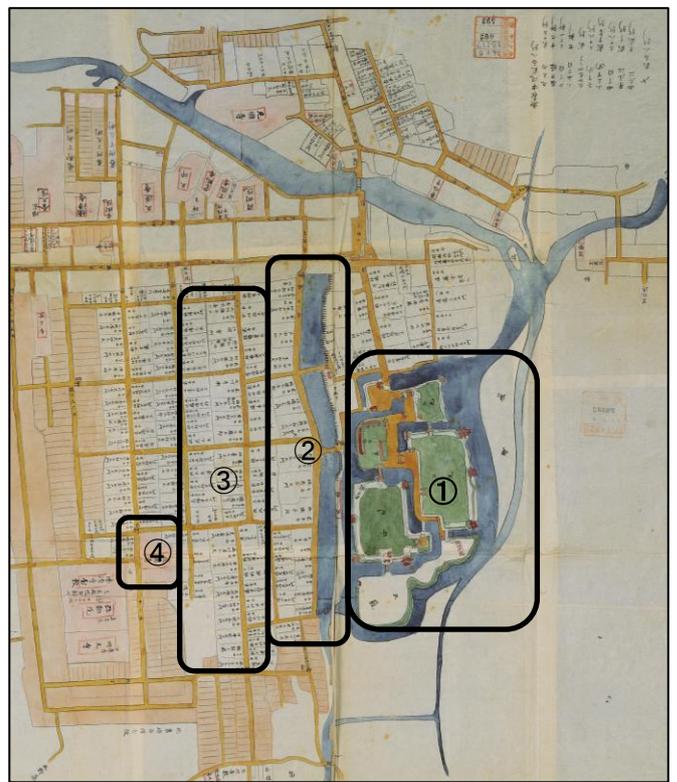
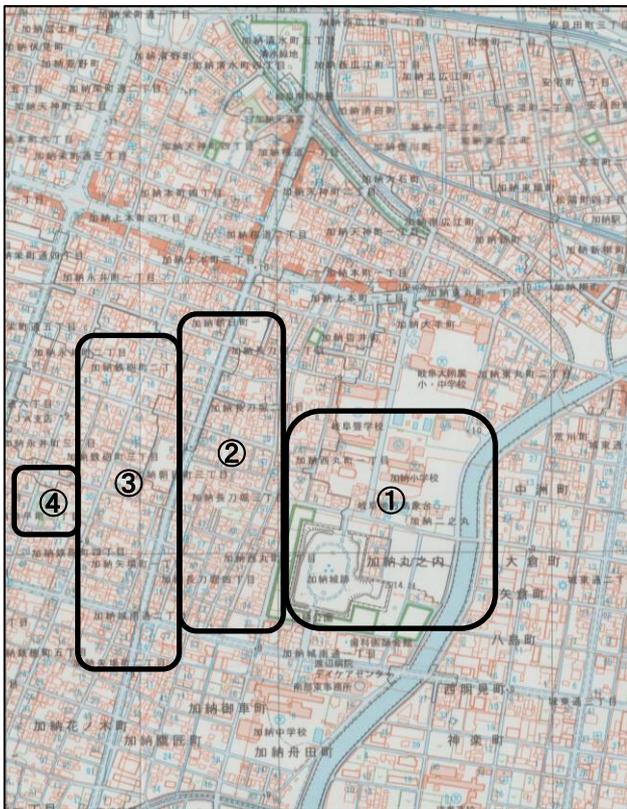
○現在も残っている地名から、江戸時代中期～後期の歴史を捉える。

→江戸の城下町の地図を読み取る学習をする際、地域にある加納城下町を取り上げることができる。現在の加納町の地図から、地名を取り上げ、「加納藩家中之図」でどの位置にあるのか調べ、地名の由来を考えることを通して、城下町の町割りの特徴への理解を深める。

	取り上げる地名（例）	「加納藩家中之図」での位置
①	加納丸之内, 加納西丸町, 加納二之丸町, 加納東丸町	加納城および、その周辺の場所。（中央東側）
②	加納長刀堀	なぎなた型の堀がつけられている場所。（中央）
③	加納矢場町	さむらい屋敷が集まっている場所。（南部）
④	加納奥平町	奥平信昌がまつられている盛徳寺周辺にある場所。（南部）

『1万分の1地形図 岐阜市』
 作成年：2008（平成20）年
 サイズ：52cm×74cm
 作者：国土地理院

*この地図は、国土地理院の承認を得て、同院発行の1万分の1地形図を複製したものである。（承認番号 平29情復、第1302号）



※原図を南北に反転

○なぜ家康は加納城をつくったのか、政策の意図を考える。

（例えば、前頁 ★1★2を追究資料にして調べる学習活動において…）

→視点①中山道に宿場町があること、岐阜町と尾張名古屋とを結ぶ道と交わっていることから、加納が交通の要所であったことを考える。

視点②豊臣氏の勢力が西にまだ広がっているということから、加納が西への守りとしての役目を持っていることを考える。西に分厚く、東に薄い町割りの構造になっていることから考察できる。

①や②のような見方や考え方を働かせて、徳川家康の政策の意図を考えることを通して、加納の城下町の歴史的意味について理解を深めることができる。

【参考文献】

- ・岐阜市教育委員会「加納城の発掘」(財)岐阜市教育文化振興事業団, 2010年
- ・加納景観まちづくり実行委員会「見なおしたい, 伝えたい 加納」岐阜県岐阜地域教育振興局, 2006年
- ・山内和幸「地名由来 飛騨・美濃」2014年, まつお出版